

変化する時代への意識改革

特別顧問

福井 康夫



1. 当社の歴史

1964年の東京オリンピックから50年の今年、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定しました。

56年の経済白書で「もはや戦後ではない」と表明され、日本は高度経済成長期を迎えます。特に64年の東京オリンピックに向け、東海道新幹線、首都高速道路の建設など、建設業が日本の高度経済成長を支えてきました。

73年のオイルショックはわが国の経済に深刻な影響を与えましたが、橋梁では、88年に瀬戸大橋が開通、94年に関西国際空港が開港、99年にしまなみ海道が開通しました。

鉄道では、97年に高崎-長野間の北陸新幹線、2002年盛岡-八戸間の東北新幹線、2011年には博多~鹿児島中央間の九州新幹線が開通しました。

一方鉄骨では、新宿高層ビル街の草分け的存在で、我が国において初めて高さ200mを超えた新宿住友ビルディングが74年完成、93年には高さ296mの横浜ランドマークタワーが完成、2012年に高さ634mの東京スカイツリーが完成しました。

当社が参画したこれらの社会基盤施設が、今日の我が国の産業と国民の生活を支えています。

2. 建設業の現状

今後、わが国は少子高齢化が進み、2035年には65歳以上の割合を示す高齢化率が3分の1を超えと言われています。適切な経済を維持するのに乗り越えなければならない大きな問題です。

当社をみても製作・施工に係る品質・工程の確保、技術・技能の継承、将来を担う人材育成、

女性・高齢者のための環境整備など課題山積です。

3. 取り組むべき課題

また、2011年度の「国土交通白書」では、2010年度時点で維持管理費と新設費が同水準となっており、2030年代半ばには更新費の水準が2010年度の新設費の水準を上回る推計となっています。

経済が成熟し、人口が減少する時代に入り、当社も「生き残り」をかけ、社会基盤施設の新設だけでなく、高度経済成長期に建設され老朽化しつつあるこれら社会基盤施設の更新・再構築など需要構造の変化にどう取り組むかも主要な課題です。

4. 技報発刊に際し新世代のみなさまへ

以上述べましたように当社を取り巻く環境は非常に厳しい状況にあります。

生産性の向上、人材の確保・育成、需要構造の変化等の課題に従来意識の仕事では乗り切れません。

ことわざ「子供は親の背中を見て育つ」があります。世の中の水準以上の能力をそれぞれの社員が持たないと競争には勝てません。まずは部下が「上司の背中」を見て育つように、上司は自分自身を磨き、成長することが必須です。

次に、これからの当社を担う新世代のみなさまは、「高い技術力で夢のある社会づくりに貢献する」という経営理念を柱に、「情熱」を持って一層の研鑽努力を積み重ねて、計画、設計段階から安全性、耐久性、社会性等の要求性能に着目し、安全で高品質かつ環境に配慮した製作・施工を行い、災害に強い社会資本の整備に取り組むことを期待しています。